本

『人間の関係』

五木 寛之 著

(ポプラ社 ¥1000)

一寸時先は闇、とは昔からよく聞かされたことばであるが、最近ほどその古風な格言が身にしみて感じられる時代はない。明日のことは分からず、政治も経済も世相も、世界もため息を付かせられる毎日である。

この本は、人間の関係を、人脈、親子関係、格差社会、恋愛、セックスなどあらゆる角度からその関係を見つめなおし、それらの根底に共通して存在しているものを紐解いている。

変わる時代に、変わらないものは何か。その答えを探し続け、著者に見えてきたものは「人間」を考えるのではなく、「人間の関係」を考えることが重要だということである。つまり、「人間」よりも、「関係」のほうにアクセントが置かれているのだ。人間は関係が全てである。

少子化や過疎化とともに人口が減り、周囲とのかかわりが希薄になっている今、人と人の間をつなぐ心のシナプス（シナプスとは：細胞間の関係を調整し、連携しあい、なんとか減少した細胞を組織して、やりくりをつける働きをする）をどう見出すか、またそれをどう生かすのか、つまり「人間の関係」こそがこれから最も重要な課題として、いま私たちの前にあらわれているのではないかと著者である五木寛之は著している。

この本を読んで、生きるヒントを得てみてはいかがでしょうか。 （比嘉清美）

『累犯障害者 獄の中の不条理』

山本 譲司 著

(新潮社 ¥1400)

手に取ったきっかけは帯にある「罪を犯さねば生きられない」の一文だった。著者は自身も刑事事件を起こし実刑判決を受けて服役した。この本は彼がその時に刑務所で出会った障害を持った犯罪者について書かれている。

刑務所内には身体、知的、聴覚、視覚、発達障害、精神と様々な分野の障害を持つ人々がいた。彼等がここに入って来た経緯は様々だが、家族や地域から見放され、顧みられずに生活していく中で罪を犯してしまう。大部分は罪を犯すという認識があるのか疑わしいものばかりだ。

障害者に対する裁判のあり方や刑務所内の矯正、更生についての指摘はもちろんだが、全篇を通して著者が訴えてくるのは、日常の生活において福祉とつながるべき人がつながらずにいる事実、受け皿としての福祉の至らなさだ。実際事件を起こしてから知的障害のあることが判明したり、出所後の居場所がなくて再び刑務所に戻ってきたりする人が多いことをこの本で知った。

触法障害者について、これまで社会ではあまり語られておらず、メディアでもタブー的な扱いとなっている。しかし、どうにもならなくて罪を重ねていく障害者という現実は私達の日常のすぐ近くに存在している。彼等が言う「刑務所が今までの人生の中で一番居心地が良い」ような社会は私達にも生きにくい社会だと思う。だから知ることから始めようと思った一冊だった。 (丹沢訓子)

あとがき

28年ぶりに履歴書を書く機会があり、職場に保管していた20代前半に書いた履歴書を見ながら書き始めました。学歴や職歴は写すだけの作業で何も考えるようなことは無かったですが、趣味やスポーツ、特技の項目や資格については色々思うことがありました▼20代の頃は趣味や特技の記載で「受かるための背伸び」のような気持ちがあって、「本もあまり読まないが、とりあえず“読書”と書けばイメージも悪くないだろう」という動機が恥かしく思い出されました。しかし今は本によって支えられたり、感想を仲間と語ったりする喜びや感謝の気持ちも込めて趣味を「読書」「音楽鑑賞」とする気持ちになったように思います▼逆に特技欄には以前と違う記述をしました。昔はスキーや楽器演奏を、その技術で皆と楽しむことを仕事のイメージとして書いたつもりでしたが、現実にはレクで障害のある人の支援にはあまり発展せずでした▼そして「今の自分には何が“特技”なのか」と考え、思いついたのが仕事で習得した色々な技術です。最初は素人であった清掃作業や緑地の管理なども30年近くやってきたそれなりの技術として「室内外のメンテナンス」と書き、気恥ずかしさもありますが、自分の経験に少しばかり自信も含め迷いや気負いのない履歴書が書けた気がします。(小出昇一)

発行：神奈川県保健福祉部
編集：小児療育相談センター
広報委員会

身近なニュース、活動報告、その他ご意見ご感想、素朴な疑問などをお寄せください。
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-9-1
小児療育相談センター 広報委員会 TEL:045-321-1721 FAX:045-321-3037
Eメール：shoniryoiku@shinseikai-y.jp

かざぐるま（隔月刊） 第189号 2009年2月1日発行

この冊子は再生紙を使用しています。

福祉の主体者 —— それは障害をもつあなたです！

かざぐるま

189
2009 2

目 次

風：カメが教えてくれたこと（野々垣睦美） …… 2
発達障害啓発週間 2009（4月2日～8日）について …… 3
ゆめ大学をスタートさせて（磯部節子） …… 4
リサイクル石けんの市民運動から生まれた“サボン草”（藤田裕子） …… 6
特別支援教育による学校づくりII
　授業づくり・学級づくり（安藤壽子） …… 8
わが子の巣立ちを見守って49
　子育て、親育て（太田多美子） …… 10
本：『人間の関係』『累犯障害者 獄の中の不条理』 …… 12

風 ～カメが教えてくれたこと

野々垣 睦美
（クラブハウスすてっぷなな）

我が家には 10 匹の猫と９匹のカメがいます。家の近くにいた野良猫を保護したり、捨て猫を預かったりで大家族になりました。カメも大半が「捨て亀」です。この話をすると「池から拾ってきたのでしょ？」とみなさん言うのですが、そうではありません。日本には生息しないリクガメが３匹、段ボール箱に入れられ公園に置き去りにされていたのです。きっと何かの事情で飼えなくなった人が捨ててしまったのだと思うのですが…。リクガメは暖かいところで生活しているので、冬の寒さには耐えられません。この子たちもカイロと一緒に箱詰めされていたところを見ると、飼い主は手放すときに心配だったのではと推察しました。

我が家に来たときには３匹とも嘴が変形し餌はうまく食べられず、筋力が落ち歩くことはできませんでした。どうすれば歩けるようになるのかな？　そこから、私とカメのリハビリ生活がスタートしました。獣医さんに連れて行き、嘴を削ってもらうことで食事はなんとかできるようになりましたが、歩くことはできません。四肢の筋力が明らかに低下していることはわかったので、毎日筋力トレーニングをすることにしました。カメの足底に私の指で負荷をかけ、少しずつ前に進んでもらう、ということを繰り返しました。言葉が通じるわけもなく、私の意図もわからなかったはず。でも半年くらいで、なんとか歩けるようになりました。今ではすっかり元気になり、日なたを求めて歩き回っています。

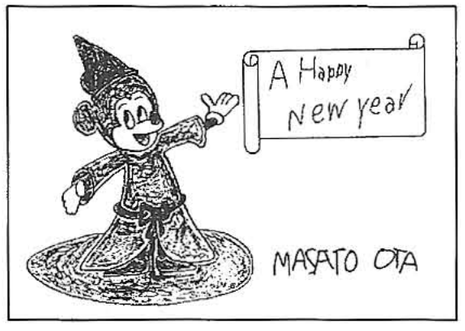
少しずつ成長していく小さな命。地道に関わることの大切さを教えてくれた大切な家族です。

表紙のことば：鶴岡八幡宮 ぼたん園（鎌倉市）

寒風からまもられ、美しく花ひらく。

〈撮影〉岡本 吉弘

中学校入学式にて



自筆のイラスト（今年の賀状）

るとまさに暗闇の中で一筋の光がさしたように、現実を受け入れられなくてもがいていた私の中に「自閉症の息子」「そんな息子のいる私たち家族」という事実が本当にフッと心の中に納まったのでした。結局なんとか受け入れができるまで丸２年以上かかり、療育手帳取得は小学校入学間際になってからでした。

◆ 小学校

小学校は地域の小学校の特別支援学級へ。なんでも初めてが大の苦手な将人に、無理強いすることなく穏やかに寄り添っていただき、言葉が飛躍的に増えました。運動会も１年生の時は校庭の隅にある岩山の上へ避難してそこから高みの見物でしたが、学年が上がるにつれ徐々にグラウンドへ。６年生の時には皆の中で組み体操を披露することができました。小学校６年間でパソコンを楽しむことや絵をかくことも覚え、できること・得意なことが増えました。

◆ 「おでかけっ！ 一人でっっ！！」

小さな頃から将人は何度もフラ～ッと行方をくらまします。保育園からも小学校からも、そして自宅からもいなくなりました。何度か繰り返すうちに「ただフラフラしているのではなく、どうやら行きたい所ややりたいことがあるようだ」ということが分かってきました。

そこでカレンダーに予定を書き入れて週末などにできるだけ将人の希望を取り入れて「勝手に出て行かなくても、この日に希望がかなうよ」と視覚的に分かるようにし始めました。すると、行きたい場所を自分で書き込んだり、「その日は無理よ」と言われると「〇〇日！」と言って次の週末ならどうだ？と食い下がります。言葉でのやり取りは苦手な将人も、こうして自分の要求を通すために一生懸命「伝えよう」と努力するようになったのです。

今の将人の大きな目標は「おでかけっ！一人でっっ！！」。昨年の年末ヘルパーさんと出かけた帰り道、将人はヘルパーさんにバイバイと手を振って３時間ほどおでかけ（脱走）してしまいました。後々、お財布に入っていたレシートやリュックに入っていた商品などから、将人がしっかり自分で欲しいモノを買い、切符を買って電車にも乗っていることが分かりました。何もできないと思っていたのは親の方だけで「僕は何でもできるゾ！」と変な自信をつけてしまったのでした。本当は中２の男子たるもの、どこへ行くにも母親や付き添いと一緒はイヤなのかもしれません。

現在の将人は反抗期真っ只中。少しでも「〇〇しなさい」と上から口調で命令されていると思うと、キッとこちらを睨みつけ、言葉にはしないものの「うるせーんだよっ」と言わんばかりにドアをば～んと閉めたりします。それでもこちらがなるべく穏やかに「〇〇してくれるかな」と頼むとすんなり行動に移し、「よくできたね、ありがとう」と声をかけるとさっきまでの目つきはどこへやら、ニッコリと将人スマイルを返します。

この反抗期しばらく続くかな？ でもどの子も通る道、そう、障害があってもなくてもね。そんなこんなで「子育て」とともに「親育て」の毎日が今日も続きます。

わが子の巣立ちを見守って 49

子育て、親育て

太田 多美子（大和市）

◆ 家族の始まり

我が家の息子将人は現在中学２年生。地域の中学校の特別支援学級へ通っています。ディズニーとサンリオ、そして電車の大好きな穏やかな男の子です。私たち夫婦は結婚して座間市に住み始め、その後すぐに将人が、そして年子で弟が誕生します。将人が４歳の時に大和市に移り住み、それからずっと家族４人でこの地で暮らしています。

◆ 手のかからない子から超多動児へ

3500ｇ近くで産まれ、出産こそは大変でしたが、その後は夜泣きもほとんどなく、母乳でもミルクでも何でもござれ。実家の母に預けて一泊で出かけてもまったく問題はなく、「子育てって楽チンだ！」と新米ママは楽勝モードでした。

ところが 10 ケ月過ぎて歩くようになったあたりから雲行きはあやしくなりました。公園などでは制止かまわず走り出すようになり、危険がないようにと必死に追いかける毎日が始まりました。絵本を読み聞かせようとしても膝から身をよじって降りようとし、乗用玩具には一度もまたがることなく、ひっくり返しては車輪をくるくると回し続けました。

「言葉がでないな、何かおかしい」「でも男の子は遅いってみんな言ってるし」もやもやした心配事を抱えた１歳６ケ月健診。保健師さんから言われた「言語面、情緒面で発達に遅れがあるようです。別室で相談してくださいね」という言葉に「えっ、なんで？どうして？？」何がどう悪いのかまったく分からず、ただただ怖かったことを覚えています。それから通いだした母子通園で３歳頃に「自閉の疑いあり」、そして５歳になって「知的な遅れのある自閉症」と診断されました。

◆ 就学まで

３歳からは保育園へ。保育園には障害児枠で入園するため児童相談所での判定も受けました。その時に手帳の取得を勧められましたが、まだ私たち夫婦は将人の障害を受け入れることができず、小学校入学までにもしかして飛躍的な成長をみせて「普通」になるかもという一縷の望みを捨ててしまいたくもなくて、この時はお断りをしてしまいました。

保育園はとても行事の多い所で、どうしても他の子との違いを目の当たりにすることが多くなりました。「○○ができない」というよりも「その場にいることすらできない」将人を見て「どうしてできないの」と一人で涙を流す苦しい毎日でした。園に預けて仕事をしている間だけは、脳みその別な部分を使っているようで全てを忘れることができました。「同じ悩みをもつ仲間がほしい」切実にそう思いました。

年長になった頃に療育センターへ通いだし、親の会にも入会し、私はそこで初めて自分以外の「自閉症の子どもをもつお母さんたち」に巡り合うことができました。それぞれの悩みを話し、グチを聞いたり聞いてもらったり。「人に話す」ということがこんなにも心を軽くしてくれるものなのだということを知りました。

実は、それまで将人がしでかす数々の失敗や失態を主人には話せずにいました。何故か将人ではなく私が悪いことをしているような、そんな罪悪感があったからです。そんな時だれかに言われたのです。「困った子じゃなくて、困っている子だよ。一番つらいのは子ども、問題行動には必ず理由があるんだよ」

それまで困っていてつらいのは「こんな子どもをもった私」だと思っていました。それからは「どうしてこんなことをしているのかな？」とまずは将人の気持ちを考えてみるよう心がけました。す

４月２日 世界自閉症啓発デー

発達障害啓発週間２００９（４月２日～８日）について

氏田 照子（日本発達障害者ネットワーク副代表）

2008 年より、４月２日が国連により世界自閉症デーと定められました。わが国においても、2005 年４月に施行された発達障害者支援法により、発達障害に対する理解や支援は国民の責務として定められています。こうしたことを受け、日本においては、世界自閉症啓発デーからの１週間を「発達障害啓発週間」と定め、発達障害や発達障害のある人たちについて、多くの方々に広く知っていただく機会とすることになりました。

発達障害のある人は、生まれながら脳機能の働きのちょっとした違いにより、日常生活や学校や職場であたりまえに必要とされる行動や学習を習得すること等に困難があり、周囲の人たちの理解と支援を必要としています。知的障害を伴う場合も伴わない場合もありますが、自閉症やその仲間（アスペルガー症候群など）、注意欠陥・多動性障害（AD/HD）、学習障害などのある人たちは、周囲の理解があれば社会を担う一員として、力を発揮することができます。そのため発達障害のある人とその家族は、多くの方々のご理解とご支援を求めています。

日本発達障害ネットワークでは、国内における「発達障害啓発週間」（４月２日～8 日）に、関係団体とともに、発達障害について、広く国民の皆様に知っていただくことにより、発達障害のある人とその家族への理解と支援の輪が広がるよう、「発達障害の支援を考える議員連盟（超党派による国会議員 137 名が参加）」や国及び地方公共団体とも連携し、全国各地の発達障害のある人やその家族や支援者の皆様に呼びかけ、各種のイベント等を展開します。

各地で行われるイベントの予定は、日本発達障害者ネットワークや加盟団体のホームページなどでお知らせしていきます。

日本発達障害者ネットワーク

http://jddnet.jp/index.files/waad.htm

『ようこそ自閉症ワールドへ！』（ライブ＆シネマ）

川崎市自閉症協会（川崎市自閉症児者親の会）は、世界自閉症啓発デーを含む１週間の発達障害啓発週間において、自閉症という発達障害の正しい理解と支援を得るための啓発イベントを行います。

日 時： 平成 21 年４月５日（日）12:30～16:45
会 場： 川崎市民プラザ（ふるさと劇場）
　　　東急田園都市線「梶ケ谷」よりバス
　　　「市民プラザ」下車
プログラム：
　◇挨拶と講演◇
　　自閉症をご存知ですか？
　　～理解と支援の輪を広げて 大人になった自閉症～
　◇ライブ＆トーク◇
　　生まれてくれてありがとう ～自閉症のわが子と生きて～
　◇映画　試写会（全国初公開）◇
　「ぼくはうみがみたくなりました」

※要申込・有料
　申込・問合せ先：川崎市自閉症協会
　　　　TEL 080-1172-6864

ゆめ大学 ～ドリームカレッジ～ をスタートさせて

NPO法人きこり ゆめ大学事務局 磯部 節子

“きこり”の活動の輪を広げる

コップの下の100円玉、水を入れると、あっ消えた。えーっ！驚きにみんなの目はまんまる。また、ある時は椅子を囲んで耳慣れない軽快な音楽にあわせて指をそらせ楽しそうに踊る･･･。平成20年4月にスタートした「ゆめ大学」の授業の一コマです。集まっている人は、障害のある人、ない人、若い人、そうでない人、男の人、女の人。授業には毎回 15人ほどの方が参加しています。

「ゆめ大学」は、20年間、障害者地域作業所として活動してきた「ウディーショップきこり」がNPO法人になることを力に、市民の方も巻き込んだ活動の輪をもっと広げようと検討され、生まれました。

きこりには、たくさんのボランティアの方に支えられて続く土曜日（第1、第3）の水泳教室があります。水泳教室を始めた頃、相模原ではまだ余暇活動はさほど活発ではありませんでしたが、時が流れ、スポーツや音楽など生活を豊かにする余暇活動は、さまざまな形で作業所や施設で展開されてきています。きこりの新しい活動は今までとは違う内容でと検討し、その中の一つが「学び」の場づくりでした。

学びの場を相模原に

平成 18 年の秋のこと、きこりに来ていた養護学校に通う方の「テレビを見ればアンパンマン、音楽はみんなのうた、いいけど、もっと勉強したいよなあ」の一言が「学び」の場を作るきっかけでした。

以前、職員が学芸大学で行われている知的障害を持つ人を対象とした授業の話を聞く研修があり、「学び」の場を相模原にという夢が生まれました。夢の実現のため具体的に動き始めるために事務局員を非常勤職員が受け持ち、準備にかかりました。

当初長年の夢を形にできる、そう考えると肩に力が入り、授業の構成、講師、開催場所、行政との協働事業になどと大げさになっていきました。けれど、開始までの1年半、検討を続けるうちに、地域作業所から始まったきこりらしく、自然体で家庭的な雰囲気を持つ活動としていこうと肩の力が抜けた形でスタートを切ることができました。

「ゆめ大学」発足まで

活動に必要な費用はきこりの家族、通所者、職員で構成されるきこり会が受けた「かながわボランタリー活動推進基金21」を活用することになりました。

まず、きこりを応援してくださる山田広美さんのデザインした講師募集のチラシが、その後ひよこが空を目指して飛び上がる楽しい生徒募集のポスターができあがりました。いよいよ活動開始です。

講師不在を聞いて「自分で良かったらやらせてもらいますよ」と最初に申し出てくれたのは、活動に賛同した磯部司郎。科学の講師が決まりました。

その後、相模原サポートセンターのスタッフ、タイ出身の荒井アオイさんと中国の近藤加奈さんが自分たちの国のことを伝える異文化の講師を引き受けてくださいました。

相模原市立博物館の館長と話をする機会にも恵まれ、博物館での講義も決まりました。

「ゆめ大学」スタート

一人でも希望する人がいたら始めよう。不安なスタートでしたが、4月の開講式までに参加希望者は、障害のある人8人、一般の方4人でした。集まった人数は少なかったのですが、一緒に学ぼうとする人の輪は楽しく気持ちの良いスタートとなりました。

その後、平成20年12月現在までに23人の方の申し込みがあり、障害を持つ人10人、持たない人13人と人数は少しずつ増えてきています。その間、授業の回数は21回。タイと中国の講座や博物館での講座、そして科学の講義が続いています。開催場所は障害者支援センター・松が丘園の研修室に定着して続いています。

のか「従えなかった」のか、吟味する必要がある。

読み書きに障害がある子ども、注意集中困難がある子どもは、黒板の文字を写すことが難しい。何故ならば、「黒板の文字を写す」という行為には、次のような複雑な情報処理過程が含まれるからである。つまり、黒板（3次元空間）に書かれた文字を、①（意識を集中し）目で見て捉え、②（不要な情報は捨てて）必要な情報だけを切り取り、③（文字ー音声言語として）記憶し、④（音声ー文字言語として）再生し、⑤手指の運動に変換し、ノート（2次元空間）に再生する、というプロセスを含み、①から⑤のどこにつまずきがあっても情報処理過程は滞ってしまう。注意集中困難では、①②が難しく、読み書き障害では、タイプによって異なるものの全てに困難が生じる可能性がある。

Bちゃんの場合、黒板に近い場所に机を移動させ、必要最小限のポイントだけを拾って、「ここを写してごらん」と書き写す箇所をマークして指示したところ、スムーズに書き写すことができた。したがって、Bちゃんは「従わなかった」のではなく「従えなかった」のであり、「写さなかった」のでは「写せなかった」のである。

授業を進める上で重要な視点がここにある。学習面の困難は行動面にも大きく影響するが、行動の陰に隠れて見え難いことに問題がある。したがって、学習面の困難を早期に発見し適切な学習支援を行うことが重要である。

適切な指導及び必要な支援

特別支援教育では、個別の教育支援計画を作成し、子どものライフステージを見通しながら学習課題を重点化し、具体的な長期・短期目標を設定する。そして、PDCAサイクル（指導仮説・実践・検証・修正）によって、次のように進められる。

まず、「一人一人の教育的ニーズ」を科学的に把握する。どのような場面で、どのような課題に、どのようにつまずくのか、学習状況や行動特性をきめ細かく観察する。さらに、客観的データに基づくアセスメントによって認知、情動、運動等の発達的要因を推定し、環境的背景を含め、学習面や行動面におけるつまずきのメカニズムを仮説する。その際、「何ができないか」ではなく「何ができるか」という視点を重視し、その子の強い面を活用し弱い面をカバーしながら学習課題を進める。

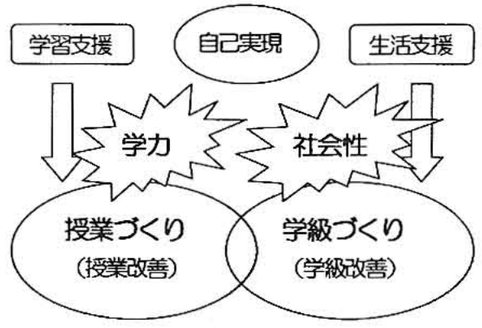
通常、指導目標は、設定期間内に達成可能あるいは効果が目に見えるよう、具体性、実効性が求められる。これによって、保護者の参加を可能にし、教師や子ども自身の動機付けを高める。

このように、特別支援教育の特長は、科学性に裏付けられた指導計画によって、一人一人の認知、情動、運動等の発達的な状況に合わせた支援が行われ、実効性を伴う授業が展開されることにある。そして、それは、学校全体の授業づくり、学級づくりに貢献する。

授業づくり・学級づくり

授業づくりとは、多様な専門的学習支援によって授業改善を図り子どもたちに学力を身につけさせることであり、学級づくりとは、多様な専門的生活支援によって学級改善を図り子どもたちに社会性を身につけさせることである（下図）。それは、学校のもつ基本的な使命であり責任である。

「誰もが少しずつ優しくなれれば」（「かざぐるま」188号）という思いは、私自身の苦い体験から浮かんだ言葉である。「特別」という用語は、区別化や排除の論理をはらんでいる。「特別」ではなく、「普通」に、通常の学級の中で特別支援教育が展開され、一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導と必要な支援が行われれば、教室は誰にも優しいものとなり、ユニバーサルデザイン化される。



特別支援教育による学校づくり Ⅱ

授業づくり・学級づくり

横浜市教育委員会養護教育総合センター
特別支援教育相談課長 安藤 壽子

特別支援教育を広げる・深める

先回は、特別支援教育の視点を学校づくりに生かすことによって、学校が生まれ変わり、社会問題化している不登校、いじめ、暴力等の学校不適応や子どもたちが示す様々な非社会的・反社会的行動の予防につながる、と述べた。学校は、閉じられた教育の場としてではなく、社会に開かれた存在として、従来とは異なる社会的な役割を果たすことが求められている。

このような状況から、特別支援教育の理念は少しずつ浸透し始めているが、一方で、取組に地域差、学校差が生じている。特別支援教育を点から線に繋げ、面に広げ、深めていくことは、今後の課題である。

小中学校における特別支援教育

特別支援教育は、「知的な遅れのない発達障害も含めて、特別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全ての学校において実施される」（平成19年、文部科学省、「特別支援教育の推進について（通知）」）という理念に基づき、全ての小中学校で取り組まれるべきものと位置づけられた。

平成19年5月現在、義務教育段階の児童生徒1082万人のうち約22万人（2.00%）が特別支援教育の対象となっており、その内訳は、特別支援学校約5万8千人、小中学校の特別支援学級約11万3千人、通常の学級に在籍し通級による指導を受けている児童生徒約4万5千人で、70%以上が小中学校に在籍する（文部科学省統計）。潜在的な数を含めれば、小中学校における特別支援教育の対象児童生徒数はかなりの数に上ると推定される。

実際に、小中学校では、発達障害（診断されている例は一部である）に関連する指導上の困難とその対応に追われる現状が見られる。

そこで、今回は、小中学校における特別支援教育の取組を中心に、特別支援教育によって学校の何がどのように変わるのかについて考えてみたい。

通常の学級での学習面・行動面の困難

通常の学級の6.3%に、学習面あるいは行動面で著しい困難を示す児童生徒がいる（平成14年、文部科学省全国調査）という報告は、学校教育が従来のままの指導法（学習・行動）では十分な効果をあげられない状況にあることを示している。

全国調査では、支援を必要とする困難要因が、学習面にある4.5%、行動面にある2.9%で、1.2%の児童生徒は学習・行動両面の合併が見られた。この結果から、40人学級では、「学習面の著しい困難」を示す児童生徒が1人ないし2人存在し、そのうち4人に1人は「行動面の著しい困難」を併せ持つことが示された。

しかし、ここで問題となるのは、「学習」と「行動」を的確に評価できているか、である。学習と行動との関係は密接に関連し、学習面の遅れが行動面の問題に波及することはよく知られている。年少児ではその傾向が顕著に表れるが、年長になると潜在化してくる。集団での学習場面では、授業が分からず不全感を募らせていても、学級担任は把握しにくい。ためていたストレスが表面化してはじめて、行動面の問題として評価される。つまり、学習面の困難は見えにくく行動面の問題に隠れてしまうケースも多いと推測される。

例えば、小学校3年生のBちゃんは、「黒板を写しましょう」という先生の指示に従わず、チャイムがなると同時に教室をとび出した。先生が追いかけて、「何故黒板を写さないで行ってしまったの？」と尋ねると、押し黙ったまま反抗的な視線を投げた。このときBちゃんは「従わなかった」

科学の授業では、電卓で数字の面白さに驚き、実験では自分で体験しながら光や水の原理を学び、異文化を知る授業では、タイや中国の言葉で挨拶し、実際に民族衣装に触ったり、講師の用意してくださったお菓子を食べ、街の写真を見ながら、心は遠く海外に･･･。

一生懸命にノートを取り、サポート係の事務局員の説明を聞き、時には講師がびっくりするような質問も出てみんなで大笑いしたり、講師をうならせたり、その眼は真剣そのもの。

新しく参加する人も、最初は「分からない」と初めての体験に戸惑っていても、次の回には積極的に授業に参加してくれます。

「ゆめ大学」の感想：勉強は楽しい！

まず、参加している学生の感想を。「面白い」そう語る佐藤秀規さんは一度もお休みをしていません。お母さんは「病院の予約が重なると病院に行くのを嫌がって予約を変更するほどです。今までの生活にない、勉強するということが張り合いになっているのではないかと思います」

お友だちと参加している田口恵美さんは「いままで勉強ってつまらないって思っていたのに、楽しい。質問したいからニュースを一生懸命見たりして質問をさがしています」

そして、授業中一番質問の多い秋山恵子さんは「学ぶということに興味があったのと、楽しそうだなあと感じて参加したのですが、毎回何かしらの発見があって次が楽しみです」と話してくださいました。

講師の荒井アオイさんは「最初は知的障害を持つ方が中心と聞き、どう話そうか迷いました。けれど、みなさんの一生懸命聞いてくださる様子や、ダンスにも積極的に参加してくださるので、私自身楽しませてもらっています。次回はタイの料理をみなさんと作ろうと思っていますが、少し辛い味にどう反応されるのか今から楽しみです」と、これからの授業予定を伝えてくれました。

科学全般を受け持ち、授業回数の多い磯部司郎は、定年退職後の生活の中に「ゆめ大学」でみんなと一緒に学ぶことを入れ、講義を続けています。「学ぶ楽しさを味わっているのは、もしかしたら自分が一番かもしれない」と実感を話しています。「図書館に行って授業中に出てきた質問を調べる、家で実験の準備をする、どれも自分の学ぶことばかり。この活動に参加してみんなと時間を共有できることに感謝していますよ」

定年退職後このような活動に参加してくださる方は、これからも見つかるかもしれない、継続のための一つのヒントです。

「ゆめ大学」これから

新年初めの授業はコラージュを福山恵美子さんが、4月には朗読を山本和子さんが講義してくださる予定です。授業にも広がりが出てきました。

とても小さなグループ活動ですが、自然な形でみんなの表情が読み取れ、ゆっくりと触れ合え、障害のあるなしにかかわらず、みんなが集中して学ぶ「ゆめ大学」。

これからも「学ぶ」心を満足させ、楽しみながら活動を継続させたいと考えています。

◎「ゆめ大学」ってなあに？
障害のある人もない人も学べる大学！　知りたい、学びたいという気持ちの学生と、伝えたい、一緒に楽しみたいという講師が、協力し合ってつくっていく「学びの場」です。

◎どんな人が学生になれるの？
学びたい気持ちがある人なら、誰でも大丈夫！　本人でなくても、通わせたいと思う人がいたら、その人を通わせて！

◎どんな科目があるの？
自然科学、文学、異文化学習など。学生のみなさんの希望をとりいれながら増やしていきます。

◎授業をする場所はどこ？
けやき会館　中会議室や、総が丘園　研修室です。

◎日にちは？
毎月、第2土曜日と第4土曜日、授業があります。

◎費用は？
実習・校外学習　以外は必要ありません。

◎学生になりたい人はどうすればいいの？
障害者地域活動支援センター「ウディーショップ　きこり」に連絡してください。　電話番号　042−752−8266

（学生募集のチラシより）

リサイクル石けんの市民運動から生まれた“サボン草”

地域活動支援センターサボン草 施設長　藤田 裕子

はじめに

皆様こんにちは。川崎市川崎区にあります、主に精神障がいをもつ方のための施設“地域活動支援センター サボン草”を紹介させていただきます。サボン草は1993年4月に小規模地域福祉作業所として開設、2007年4月からは障害者自立支援法に基づく地域活動支援センターとなり、現在に至っています。

1993年という年は「障害者基本法」が成立し、精神障がい者が基本法の対象として明確に位置づけられ、精神障がい者に対して、これまでの保健医療対策に加え、福祉対策の充実をはかることが求められるようになった年でもありました。さらに1995年には上記のことをより発展させることをめざして従来の「精神保健法」を改正し、「精神保健及び精神障害者福祉に関する法律」（「精神保健福祉法」）が施行されました。「精神保健法」でうたわれた「入院患者の人権擁護と適正な医療と保護の確保ならびに社会復帰の促進」に「自立と社会経済活動への参加促進のための必要な援助」が目的をもって追加されたのです。

そして精神保健福祉施策を推進するためには、今後市町村の役割を強化し、地域で生活する精神障がい者へのきめ細かい対応を行っていくという方向が示されました。それまでは精神障がい者にかかわる方たちが任意で作業所をつくり、細々と運営されていたものが、その方たちの働きかけもあり、公的補助金が獲得でき、当サボン草も時代の要求ということもあったのか、時期を同じくして作業所の仲間入りをしました。しかしながら設立の過程は他の多くの作業所とは異なっていますので、その成り立ちからお話しします。

リサイクルせっけん工場の設立と運営

サボン草の運営母体であるNPO川崎市民石けんプラントの前身である㈱川崎市民石けんプラントの設立は1989年です。それは川崎市内の学校、一般家庭、レストラン等から出る使用済み食用油を集めて、環境にも身体にもやさしい粉石けんに作りかえ、それをまた市民が使うという、環境、リサイクルの視点をもった市民運動が始まりです。

1990年に、長年の要望で川崎市から工場建設のための土地をお借りすることが決まったあと、多くの市民、生協、市の労働組合等の出資により工場を建設、稼動し始めました。工場が建った所は、川崎区の埋立地の運河沿いで緑がほとんどない“地の果て”のようなところでした。そこで志をもった7名の女性（全員主婦）と生協から派遣された男性職員1名、かつてアルコール依存症でしたが、すっかり立ち直った60歳代の男性1名、そして大手企業から解雇され、職を失っていた軽い知的障がいをもつ30歳の男性1名とで石けんづくりとそれに関する作業が始まりました。7名の女性たちはリーダー1名を除いては、全員が週1～2日の労働で、しかし高い志をもって運営に責任をもち、利益が出れば分配するというワーカーズコレクティブという形をとっていました。

職親から地域作業所へ

スタート時、賃金がもらえるとは思っていませんでしたが、そこそこの質の石けんができ、販売先も確保し、私どもも最初から時給500円が支給されたと記憶しています。そして社会的対応を考えて株式会社形式をとっていたので、その当時川崎区の保健所のソーシャルワーカーが職親制度を利用して精神障がいをもつ方を次々と送り込んできて、私たちもそれを全員引き受けていました。そして工賃を支払っていましたので、お金の面で少し厳しくなった頃、地域福祉作業所の運営が提案され、1年かけて準備し、1993年より“サボン草作業所”としてスタートしました。

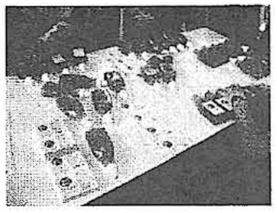
そんなわけで他の作業所と異なり、家族会など精神障がい者にかかわり支えてきた人が主体でなく、働き場と作業があって、他より少し高い工賃が得られる、まず工場ありきの作業所の設立だったわけです。ですから指導員と呼ばれる私たちは皆、精神病、精神障がいに関してずぶの素人で、最初は対応を間違えたこともあったことと思います。

ちょうどその頃組織された川崎市精神障害者作業所連絡会に加入し、他のベテラン指導員、市のケースワーカーたちと交流し、また研修会にも積極的に参加し、勉強を重ねました。2001年、2003年には現場の経験5年以上という権利をもとに猛勉強して、2名が精神保健福祉士の国家資格を取得し、その後の通所メンバーへの対応に反映されているものと思われます。

油回収

荷積み

袋詰め


シール貼付

石けんづくり作業はさまざま

設立以来続けられているサボン草の作業とは、リサイクル石けん“きなりっこ”の原料である廃食油を1.5トントラックで回収するところから始まり、油の濾過・脱色・脱臭過程、製造過程、製品の袋詰め・梱包過程、そして最後はトラックでの製品配達まで、すべてにかかわるものです。力のいる作業といえば最大20リットル入った1斗缶あるいはポリ缶の積み下ろし、大きい油槽への油あけ、10kg、12kg等製品の入った段ボール箱の受け渡しなどです。また油をあけた後の1斗缶をつぶす作業もコツと力がいります。夏場は汗をびっしょりかきます。手先の作業としてはチラシを折ったり、製品にシールを貼付することなどがあります。

一般家庭で一番使われる2kg袋、小学校の給食室で食器洗浄に使われる5kg袋は日常的に袋詰めし、ストックしています。昨年2007年度は約53,000リットルの廃食油を回収し、そのうち37,000リットルを石けんにし、でき上がった石けんは64.8トンにもなりました。建屋の外には濾過前の油、建屋内には脱色、脱臭後の油が常に2,000～3,000リットル貯蔵されています。

工場設立から3年前までは地の果てのような場所にある、みすぼらしい工場が作業所でもありましたが、私たちも通所メンバーも今思えばよく通ったものです。そんな場所で女性と障がい者が油まみれ、粉まみれになって古い機械と奮闘している様子を見て、ご近所の奇特な事業主の方が交通の便がよい現在の場所に工場兼作業場をつくってくださり、私たちは家賃を払ってお借りしているという状況です。

作業後は一緒にお茶の時間も

今の建物は通所メンバー用の食堂、横になってくつろげる部屋、面談室もあり、どこも明るく、どなたが見学にみえてもびっくりし、うらやましく思われるようです。そんな建物もステキで工賃もよい（1年通所すると時給700円）、当センターに登録しているのは2008年12月末現在20名で全員男性です。在籍年数は15年から数ヶ月とまちまちで、平均年齢は約40歳です。親元から通う人が多数を占めますが、生活保護で一人で自立している人も数名あり、ほとんどの人が障害年金を受給し、ここでの工賃とで質素ながらもある程度生活を楽しむ術を心得ているように見えます。

作業は月曜日から木曜日の午前9時30分より午後2時までです。2時から1時間ほどは私ども職員も加わり、お茶を飲みながらの歓談の時間です。金曜日は月1回はミーティング、そして他の日はレクリエーションにあて、補助金の中の活動費を有効に使い、楽しく有意義な時間を過ごす努力をしています。

当センターに通所する基本的条件は、きちんと通院し、服薬を怠らないことです。日々通所することで昼型の生活のリズムをつくり、一般社会生活のルールを守り、地域の中で普通に生活できる幸福を得てほしいと願っています。そしていろいろな作業を通して能力を向上させ、次のステップを望む人にはその道を開いていくのが私どもの仕事と思っています。

しかし、現在地域活動支援センターであるが故にあまりにまちまちの能力、まちまちの自身の将来的展望をもった人が通所しているため、統一した指導ができないことが悩みの一つです。現在通所しているメンバーの理解を得ながら、どのような形で就労支援事業に移行していけるのか、いけないのか、私どもにとって重い課題となっています。